

日系アメリカ人戦時収容所における食と支配

和泉真澄

はじめに

第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制移動および収容事件は、アメリカ合衆国で起こったさまざまな人種差別・人権侵害に関わる出来事のなかで最も多くの学術研究が出されている領域のうちの一つであり、一般社会からの関心も低くはない。今日のトランプ政権下では、アメリカ国内に暮らしている非正規移民の摘発が強化され、また、居住地域の安全が脅かされて保護を求めてやってくる中米諸国からの亡命希望者（asylum seekers）の幼い子どもが国境で無期限に親と引き離されていることから、移民やマイノリティの身体拘束と人権の問題がアメリカ社会で緊迫した議論を生んでいる。このような社会情勢のなか、日系人は自らの戦時収容体験を公共の場で語る機会が増えている。事実、亡命希望者の親子を引き離す収監政策には、本稿で取り上げる「ツールレイク隔離収容所（Tule Lake Segregation Center）」やその他の日系人強制収容所のなかで生まれた日系アメリカ人が率先して批判の声を上げている¹⁾。

日系人強制収容所の歴史がアメリカ史上の重要な人権侵害の例として教えられることで、現在の同様の人権侵害に対する啓発活動や抗議活動に生かされるのは有意義なことである。しかし、強制収容所の歴史がアメリカ市民の公民権侵害という観点からのみ捉えられることには問題もある。というのは、日系人収容所に入れられたのがアメリカ市民である二世だけでなく、日本国籍を持ってアメリカに在住していた一世を含んでいたという意味では、国境をまたぐトランスナショナルな問題でもあるからだ。さらに、被収容者の権利の問題のみに関心が集中することで、収容所のなかで日系人は何を着て、何を食べ、どのような暮らしをしていたのかという、具体的な観点からの歴史の掘り起こしが遅れてしまっているという点も否めないのである²⁾。

日系アメリカ人が強制移動させられ、収容所に入れられたのは、軍事的必要性という大義名分のもとであったが、戦時中にスパイとして逮捕された日系人は一人もおらず、数多くの二世がアメリカ軍に従軍して大きな犠牲を払いつつ輝かしい戦果を挙げたといった事実は、日系人がアメリカに対して強い忠誠心を抱いていたことの根拠として指摘される。しかし、日系人のアメリカに対する忠誠の面のみが強調されることによって、実際には存在した、アメリカ政府の立ち退き命令に従わなかった人々やアメリカへの無条件の忠誠を求められたときに「ノー」と答えた人々の存在が、日系人の戦時体験の語りから抹消されてきたのも、日系人強制収容の歴史研究が長年抱えてきた問題なのである。

発表者は、以上のような問題関心から、アメリカの日系人戦時収容所における生活の実態を衣食住という観点から調査する必要性を感じ、収容所における食に関する研究を進めてきた³⁾。

本稿で取り上げるのは、日系人戦時収容所の中でも、親日的でアメリカに対して不忠誠であるとされた人々が隔離されていた、ツールレイク隔離収容所における食の実態を明らかにしたいと思う。戦時隔離収容所における食を考えることによって、戦争と食、あるいは食と支配というテーマを掘り下げることにつながれば幸いである。

1. 第二次世界大戦中のアメリカの食品広告

戦争と食ということで、まずは簡単に第二次世界大戦中のアメリカの食品の広告を見てみたい。第二次世界大戦は総力戦であったため、日常的な食品といった、一見戦争とは無関係に見えるものの広告にも、戦争が色濃く現れた。例えば、ネスレ (Nestlé's) という大手チョコレート会社の広告では、上部に軍用ヘルメットをかぶり制服を着た白人男性兵士が片手にチョコレートを持っているイラストが描かれている。広告の真ん中には「Chocolate is a Fighting Food!」というキャッチフレーズが躍り、チョコレートの栄養価が肉や卵、パンなどのカロリーと比較して表にされている。下にはネスレのチョコレート商品が並んで描かれている。(図1)

ケログの全粒粉シリアル広告では「戦時の勝利者の食品!」という謳い文句のもと、このシリアルの効用について、「時間と労力の節約」、「肉と牛乳の長期持続」、「貴重なタンパク源」、「全粒粉シリアル」というタイトルで挿絵と説明書きがある。これは、戦争中に肉や牛乳が配給制になっていたため、それらに代わるタンパク源としてシリアルが販売促進されたことを示している。(図2)

図3の広告は、菜園を害虫から守る殺虫剤の宣伝である。戦争中に不足する食料を補うために、家庭菜園が奨励された。この菜園は「勝利の菜園 (Victory Garden)」と呼ばれていた。上部には「撃ち殺す! (Shoot to Kill!)」という赤い大きな文字が書かれ、女性が殺虫スプレーを銃のように構え、トマトを荒らす悪い虫に殺虫剤をかけている。下には「勝利の菜園を守ろう (Protect your victory garden)」の文字がある。銃を構える女性の姿は、銃後でアメリカ人の食料、すなわち生命を守る国民の心得を示しているとも読み取れる。

このように、戦争はアメリカ人の生活のあらゆる場面に影を落とし、生存の基盤である食にも当然その影響は及んだのである。

CHOCOLATE IS A Fighting FOOD!

MAXIMUM maintenance with minimum bulk has been the objective of the U. S. Army in selecting the food for our fighting men.

That is why the chocolate has become one of our every fighting food of the war. Its share is more quick energy packed into the familiar chocolate bar than is contained in many uncommanded energy foods. It has become one of the staples in the profusion of keeping the soldier supplied with food in cookers, lighted, mobile warfare.

In fact, only the important Type D Army Emergency Ration for use under extreme field conditions is a chocolate bar.

Delicious, nutritious and compact—chocolate is everybody's favorite, whether on the fighting front or at an energy food, or on the home front as a quick pick-me-up.

Although serving our fighting men comes first, Nestlé's Chocolate Bars by the familiar Nestlé's wrapper, may still be found in delicatessen shops throughout the country.

COMPARATIVE ENERGY VALUES	
1 1/2 lbs. Nestlé's Milk Chocolate	Calories 1075
2 medium milk chops (beef)	170
1/2 dozen milk (12 eggs)	180
1 loaf	140
2 slices bread	100

NESTLÉ'S THE WORLD'S GREATEST BRAND OF CHOCOLATE

(図1)



(図 2)



(図 3)

2. 第二次世界大戦中の日系アメリカ人とツールレイク隔離収容所

次に、日系アメリカ人の強制収容がどのような政策であったのかについて、少し説明をしておこう。

1941年12月の日本による真珠湾奇襲攻撃により、日系人の運命は大きく変わる事となった。アメリカ西海岸にあるカリフォルニア、オレゴン、ワシントンの三州は、日本の攻撃を受けて、アメリカの防衛にとって極めて重要な地域とされた。戦争遂行を司っていた陸軍省は、「移民したからといって人種的な絆が絶たれるわけではない。日本人は敵性人種であり、二世・三世はアメリカ市民ではあるけれども、人種的血統は薄まるわけではない」という論理に基づき、1942年2月、「日本に起源を持つ者全員」を太平洋岸100マイル地域から立ち退かせることを決定した⁴⁾。

軍にアメリカ市民である二世を含む日系人全員を強制的に西海岸から立ち退かせる権限を与えたのは、大統領行政命令第9066号であった。ところが、この大統領令には「日本」や「日系」という言葉は全く含まれていなかった。この命令は、陸軍は「合衆国内のあらゆる地域を防衛地域と指定することができ、そこからいかなる人物を立ち退かせることもできる」という極めて大風呂敷な文言で出来上がっていた。もちろん大統領も、この命令を追認した連邦議会も、実際に陸軍にこのような広範囲な権限を与えるつもりはなかった。この行政命令に反対が出なかったのは、関わったすべての人々が、命令は国籍に関係なく日本人の血を引く者だけに適応されることを、暗黙の了解として共有していたからである。

軍の命令によって、カリフォルニア州、ワシントン州、オレゴン州の太平洋岸から約12万人の日系人が、ひどいときは24時間、あるいは48時間、72時間以内に手で持てる荷物だけを持って指定場所に集合し、まずは仮収容所という形で設定された西海岸の100マイル地域内の施設に入れられた。自らも収容体験を持つ画家のミネ・オークボは、立ち退きのためにまとめた荷物に家族ごとに番号が付けられた様子を描いている⁵⁾。番号札は荷物だけでなく、人間にも付けられた。仮収容所は競馬場の馬小屋などを少し掃除して日系人を住ませたため、住まいには家畜の匂いが残っており、狭くてプライバシーも無かった。多くの人は、何十年も必死に働いて築き上げた財産の大半を失った。

軍は次に、より長期間の生活に耐えるキャンプである「戦時転住所 (War Relocation Camps)」を100マイル地域外の内陸部に建設するよう命じた。キャンプの管理は軍ではなく、行政府のなかに新たに立ち上げられた「戦時転住局 (War Relocation Authority : WRA)」が行うこととされた。戦時転住所は鉄条網で囲われ、銃を持った兵士が銃口を内側に向けて警備していた。住居は大きなバラックで、一つのバラックは4つから6つに仕切られた部屋で成り立ち、それぞれの部屋に一家族が暮らした。14のバラックが1つのブロックを形成しており、1つのブロックには「メス・ホール (食堂)」と男性用・女性用の共同トイレ、洗濯場とアイロン場が備えられていた。各ブロックにはブロック・マネージャーと呼ばれる、住民から選挙で選ばれる代表者がいた。収容所は人里離れた内陸部の砂漠地帯や湿地帯に建設されたため、住人は暑さ、寒さ、部屋のなかにまで吹き込む砂埃、虫、そして集団生活によるプライバシーの欠如などに苦しんだ。各部屋に台所はなかったので、食事は軍から支給される食べ物を「メス・ホール」で取ることとされた。食糧支給を補うため、各収容所には農場も作られ、野菜などの生産が行われた。収容所の生活に必要な労働は、非収容者が担っていたが、労働に払われる賃金は、熟練職で1ヶ月19ドル、通常職で16ドルとされ、外の社会の十分の一にも満たなかった。

軍隊が西海岸に住んでいた日系人を収容所に入れた公式の理由は「軍事的必要性」とされていた⁶⁾。日本と交戦状態になり、日本人移民コミュニティに利敵行為を行うスパイがいるかもしれないというのがその大義名分であった。しかし、軍隊および政府は、日系コミュニティを戦争開始以前から詳細に監視しており、西海岸に住む日系人の圧倒的多数は国家安全保障にとって危険ではないと考えていた。それでも日系人は収容された。軍は強制収容を説明するために、日系人の圧倒的多数は安全だけれども、なかには極少数の危険分子がいて、日本人がアメリカ人とは異人種であるため、その危険な人物の特定を必要な短時間のうちに行うことができない、という議論を展開した。この論理に従い、危険な人物と安全な人物の区別を行うため、収容所に閉じ込められた日系人全員に「忠誠質問」が行われることになった。質問への回答で親米的であると考えられた人々は収容所から解放される許可をもらい、東部や中西部などに再定住していった。一方、忠誠でないと判断された人物は、戦時転住所からツールレイクの「隔離収容所」へ移された。

親米的か親日的か、アメリカに忠誠か不忠誠かの区別は極めて不合理な要素で判断された。たとえば、日本語ができたなら不忠誠に近く、英語しか話せない人は忠誠に近いと判断された。また宗教では、キリスト教徒であれば忠誠で、仏教徒や神道の信者は親日的で不忠誠とされた。さらに忠誠質問には、日系人に大混乱を引き起す2つの質問が含まれていた。27番目の質問は

アメリカ軍に従軍し、命令されればいかなる場所でも戦闘任務につくかどうかを問うており、28番目の質問は、アメリカに無条件の忠誠を誓い、日本の天皇への忠誠心を放棄するかを問うていた。この質問に9割以上の人々は「イエス」と答えているが、どちらか、または両方の質問に「ノー」または「中立」と答えた場合、あるいは回答を拒否した場合は、その家族はツールレイクに移住しなければならなかったのだ。「イエス」と答えたら、転住所から解放される可能性があるが、市民である二世の場合は、それによって徴兵される可能性が生じることとなった⁷⁾。

ツールレイクは初めから隔離収容所だったわけではない。初めは他と同じ、アメリカに10ヶ所作られた戦時転住所のうちの一つだった。しかし、収容所の管理が当初から強権的で、被収容者の間には強い不満が溜まっており、また、忠誠質問の行い方も性急で回答の際にさまざまな憶測や噂が飛び交い被収容者の不安と混乱を増幅した結果、忠誠質問に「ノー」と答えた割合が突出して多くなったのだ⁸⁾。こうして隔離収容所となったツールレイクへ、他の転住所から続々と「不忠誠組」とされた人々が移送されてきた。ツールレイクで「イエス」と答えた人は他の転住所へと送られた。この三度目の強制移動（一度目は自宅から仮収容所へ、二度目は仮収容所から戦時転住所へ）が完了した1943年11月初旬に、ツールレイクで「暴動」が発生し、その結果軍隊が介入して、収容所全体が戒厳令下に置かれた。軍隊は騒動の扇動者を捕まえるためにバラックを捜索し、また密告などを通じて「トラブルメーカー」とされた人々を監房（Stockade、「営倉」と訳されることもある）に収監した⁹⁾。監房では、捕らえられた人々に対してFBIによる尋問が執り行われた。監房に収容された者は、全部で400名ほどに上ると考えられている¹⁰⁾。尋問の結果「危険分子」とされた者は、ノースダコタ州のフォート・リンカーンやテキサス州のクリスタル・シティなどの捕虜収容所に送られた。

忠誠質問は、日米開戦以前には日本とアメリカのどちらにも愛着と帰属意識を抱いており、また日本とアメリカという2つの国家に対する関係性のなかで極めて多様なアイデンティティの持ち方をしてきた日系アメリカ人に二者択一を強要した¹¹⁾。この過程を通じ、「イエス」と答えた大多数の日系人は、もともとアメリカ人であるにも関わらず、極めて「排他的なアメリカ人性」、すなわち他の帰属意識を排除した形のアメリカ人アイデンティティを集散的に形成し、それを強調した形で人生を歩んでいくこととなる。日系人はアメリカの多くの民族のなかでも平均年収や学歴が高く、また法を犯さない良き市民「モデルマイノリティ」であると一般に認識されている。一方、ツールレイクで戦中を過ごした人々は、日系コミュニティのなかでもマイノリティとなり、戦後も「不忠誠者」のレッテルを負わされた。ツールレイクの元被収容者が自分たちの体験を公共の場で声を大にして語り始めるには、21世紀まで待たなければならなかったのだ。ツールレイクの語りはまだ始まったばかりであり、隔離収容所の意味に関して、公民権の侵害や戦争とマイノリティ、政府の不正義と抵抗といった観点からの議論は、少しずつ進みつつある¹²⁾。しかし、隔離収容所の衣食住や生活実態がどのようなものであったのか、また、収容所のインフラとツールレイクの管理の失敗や秩序の崩壊とがどう関わったのかといった問題については、詳細な研究がなく、今後の課題として残っている。

3. ツールレイク隔離収容所監房日記 (Tule Lake Stockade Diary)

上で示したように、まだあまり実態のわかっていなかったツールレイク隔離収容所の生活に関して、1つの貴重な資料が見つかった。それが本稿で紹介する新たな一次資料、すなわちツールレイク隔離収容所のなかで「トラブルメーカー」として当局から監房に投獄された婦米二世、井上龍生によって日本語で書かれた日記である。本資料は、筆者が2013年にシアトルで行われた「リドレス（強制収容に対する政府による公式謝罪と補償）25周年」を記念した会議に参加した際に、偶然、井上の二人の娘に出会ったことから入手に至った¹³⁾。

同学会中に、井上龍生の次女アーニー・ジェイン・マサコ・ニシイと三女のナンシー・キョウコ・オダは、父親が戦争中に日本語で書いた日記を戦後にずっと世に出したいと考えていたことを筆者に伝えた。井上の家族は、戦争中にアリゾナ州のポストン収容所からツールレイクへと移送されたが、父はバラックから突然監房へと連行されたという。そこで、日記のページをPDF化して筆者に送ってもらい、日記の内容や手書きの文字が読めるかどうかなどを確認することにした。幸いなことに、日記はきれいな読みやすい文字で書かれており、保存状態もよかったので、まずは日本語で文字起こしをすることにした。

日記はポストン収容所分（1942年6月3日から1943年8月23日）が1冊、ツールレイク収容所分が1943年10月6日から1945年1月17日までの8冊あり、うち、3ヶ月にわたる監房収監時（1943年11月13日から1944年2月14日）の日記が5冊あった。PDFをもとに、リサーチアシスタントを雇用して文字起こしを進め、現在ツールレイク収容所分は完了している。しかし、内容の英訳には非常に労力と時間がかかるため、井上の遺族に早く翻訳を届けることを優先し、監房収監時の獄中記のみを訳すことにした。なお、この英訳に関しては、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のアジア系アメリカ研究センターが高く関心を示したため、UCLAと遺族、筆者の三者で協議を重ね、現在では、UCLAの「SUYAMAプロジェクト」というデジタルアーカイブで「Tule Lake Stockade Diary」とエントリーすると、本文が閲覧できるようになっている¹⁴⁾。

井上龍生には三人の娘がいたが、長女のフランシス・サユリは早くに亡くなったため、筆者は遺族としか面識がない。次女のアーニー・ジェイン・マサコは、英訳の原稿が完成した2ヶ月後に、残念ながら病気で亡くなった。マサコからは体調が良くないので完成を急いで欲しいという依頼を受けていたが、校務などが忙しく、翻訳には時間がかかってしまった。完成した原稿をすぐに送ったところ、亡くなる前に父親の日記を読み、父の体験や当時の父の家族への思いを知ることができたという連絡があった。筆者としては、翻訳の完成が間に合ったことに深く安堵している。その後、三女のナンシーとUCLAと一年ほど準備を進めた結果、2018年夏にUCLAウェブサイトで本文が公開された。

井上龍生は1910年にロサンゼルスで生まれ、1999年に亡くなった日系二世である¹⁵⁾。3歳の時に両親の故郷の熊本に送られ、18歳で帰国しているので、日系二世であるが母語は日本語、日本で育ち、小学校から高校までの日本の教育を受けた典型的な「婦米二世」である。遺族から提供されたFBIファイルの記録によると、彼は二重国籍者であり、軍事教練を含む日本の高校の教育を終えた後、1928年にアメリカに戻り、ランカスターでジュニア・カレッジを卒業し、

同市で日本語教師となった。日本語学校の元生徒であった二世のリリー・ユリコ・スギモトと結婚し、彼女を連れて故郷の熊本や日本各地、満州などをハネムーンで旅行している。その後、ロサンゼルスに移り、ダウントウンの近くで、リリー・イノウエの名義で青果店を営んだ。

井上龍生は日本で柔道を習い、5段を習得した。カリフォルニアでも柔道の指南をしており、1932年のロサンゼルス・オリンピックでは講道館南加柔道有段者会を代表して、柔道の演武にも加わっている。宗教はFBIファイルによれば「無」となっている。

ポストン収容所で忠誠質問を受けた井上は、質問27（米国陸軍での兵役に応じる意思の有無）に「ノー」、質問28（米国への無条件の忠誠を誓う意思の有無）に「中立（neutral）」と答えている。そして、1943年7月20日には一家の日本への送還申請に署名を行なった。こうして、井上一家はポストンからツールレイクに移動した。ポストンで一緒だったリリーの実家のスギモト家の人々は、このとき井上に「イエス」と答えるよう泣いて頼んだという。しかし、井上の意思は固かった。

ツールレイクで他の被収容者からの密告を受け、井上は1943年11月13日に突然、監房に連行された。監房でFBIの尋問などを受けた結果、1944年2月14日に、これまた突然釈放されて家族のバラックに戻った。彼の連行、収監、釈放の理由は、当時もその後も一切説明されなかった。井上が監房にいた当時、長女のサユリは6歳くらい、次女のマサコは4歳くらいの幼子であった。家族によれば、このときに父親が突然連行されたことは、マサコの精神的安定を一生にわたって損なったという。マサコは成人して結婚し、三人の息子を持つセラミック・アーティストとなった。彼女は自分のアートのなかで、強制収容所のモチーフを何度も描いている。三女のキョウコはツールレイク生まれである。戦後はロサンゼルスで教職に就き、公立学校の校長を長年にわたって勤めた。つまり戦争中に井上は送還申請はしたものの、戦争が終わると一家はロサンゼルスに戻り、そこで生活を再建したのである（図4）。

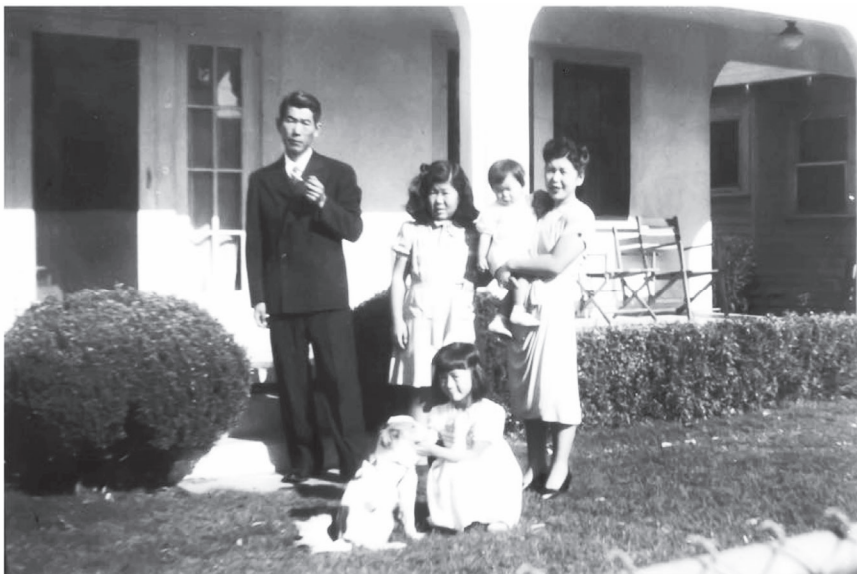


図4 戦後ロサンゼルスでの井上一家（写真提供：ナンシー・キョウコ・オダ）

さて、ツールレイク隔離収容所のイメージといえば、「報国青年団」をはじめとする親日派の集団が、ハチマキをして朝礼で「天皇陛下万歳！」と叫び、「わっしょい、わっしょい」と軍隊式の行進をして、坊主頭で日本への愛国心を他の被収容者にも強要していた、というものである（図5）。実際にツールレイクの住人の中には親日派からかなりのプレッシャーをかけられたという証言もある一方で、親日派の行為については、戦後にアメリカに残った日系人のイメージを良くするために、暴力的なイメージを一部の親日派に押し付けたという説もある¹⁶⁾。このような親日派は18,000人を超える入所者のごく一部であったことが、今日の研究では指摘されているが、このようなイメージが流布したことで、ツールレイクの元被収容者は「不忠誠」の烙印を今日までも払拭できていないと言えるだろう。隔離収容所の中で親日派になった人々や、そうはならずにツールレイクで暮らした人々がどのようなアイデンティティを持っていたのかは、非常に複雑な問いである¹⁷⁾。アメリカに裏切られたことで親日派になったという解釈もあれば、もともと日本人移民は日本国や日本の天皇に対して忠誠心を持った存在であったという解釈もある¹⁸⁾。ピークには18,000人もいたツールレイクの被収容者のアイデンティティは極めて複雑で多様なものだったと考えるのが正解であろうが、この問題については、また別稿で論じたいと思う。



（図5）ツールレイクからサンタフェの捕虜収容所に移送される仲間を送り出す奉仕団団員たち
（撮影：R. H. Ross, 戦時転住局）

井上一家がツールレイクに到着したのは、1943年10月初旬のことである。その後まもなく、収容所を戒厳令へと導く事件が起こった。収容所の農場からキャンプに帰る途中で労働者を運んでいたトラックがスリップ事故を起こして、一人が車から投げ出され、死亡した。遺族への不誠実な対応に抗議してキャンプ住人たちが農場での労働を集団で拒否すると、ツールレイクのWRA当局は他の収容所から労働者を動員、基準とされていた給料の10倍の賃金を与えて農

作業をさせた。当然、キャンプ住人は当局への反感を強めた。管理当局の対応のまずさは、すでに疑心暗鬼になっていたキャンプ住人の間に、兵士が食料を盗んで外で売っているといった、さまざまな噂が飛び交う原因ともなった。被収容者は質の悪く量も少ないキャンプの食べ物の改善を要求した。10月15日の井上の日記にも、ファーム（農場）でつくっているベジタブル（野菜）が同胞のためならば喜んで働くけれども、「米軍食糧補戦に立たされるのは真平である」と記述されている¹⁹⁾。

筆者の調べた記録では、各日系人収容所で生産された野菜などの食糧は、その収容所で消費されたほか、食糧の足りない他のキャンプに送られており、米軍への供給はされていなかった²⁰⁾。しかし、井上らにそのことがわかるはずもなく、不確かな情報や当局への不満は、上のような憶測を呼ぶ大きな要因であった。10月19日の日記には、キャンプ内のあちこちで被収容者同士の暴力沙汰が発生したため、井上が代表する柔道部も治安維持に協力するよう、当局や住人を代表する委員会から要請があったことが記録されている²¹⁾。これに対し井上は、柔道は健全な青少年を育成するために教えるもので、用心棒になるためのものではない、と心の内を明かしている。

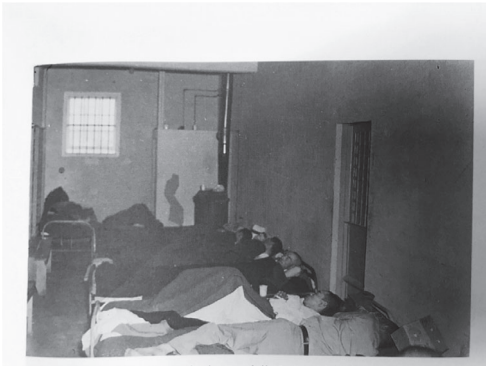
農場のストライキが続くなか、10ヶ所の収容所全体の管理責任者であるディロン・マイヤー WRA 局長が11月1日にツールレイクを訪れた。ツールレイク収容所のレイモンド・ベスト所長と会談中に、日系人の住人を代表する「代表者会」が収容所の状況の改善要求書を提出した。所長のいる建物前の広場には5,000名の被収容者が集まり、当局がどう答えるかを見守っていた。要求は拒否された。三日後、やはり広場に多くの人が集まっていたところ、兵士たちがトラックで野菜を大量に運び出しているのを見たという話が人々の口に上り、食べ物が盗まれているという噂となって、場が騒然とした。慌てたベスト所長は、軍隊の救援を要請し、装甲車と銃を持った兵士が続々と収容所内に踏み込んだ。これが、のちに「暴動」と記録されることとなる、1943年11月4日の事件である²²⁾。

この日からキャンプのなかを兵士が銃を持って巡回するようになり、当局がいわゆる「トラブルメーカー」の拘束を開始した。井上が突然居住区から監房へと連行されたのは、11月13日、すなわち戒厳令が敷かれる一日前のことである。そのときの様子を井上は詳しく記録しているが、詳細は別稿に譲りたい。しかし、ここで確認しておきたいのは、ツールレイクの騒乱の原因が、親日派によるプロパガンダやアメリカに対する不忠誠というよりも、食糧が盗まれたという噂であったことである。

同じような現象は、有名なマンザナー収容所でも起こっている。カリフォルニアのマンザナー収容所で肉と砂糖が支給分よりもかなり減っており、それを調査しようとしていたハリー・ウエノが、「当局寄り（イヌ）」と住人から考えられていたフレッド・タヤマという二世の集団殴打事件の犯人として逮捕されたことで、「暴動」が発生した。ウエノの釈放を要求して集まっていた2,000名ほどの入所者に、軍隊が発砲し、二人の死者と多数の怪我人が出た。この事件も、親日派と親米的な JACL の間の対立の構図で捉えられることが多いが、被収容者の不満や怒りが極端に高まっていたことに劣悪な食糧事情が大きく関わっていたことは間違いない。

井上龍生の監房日記は、監房が銃剣を持った兵士によってものしく警備されていること、毎日、霜が降りる寒い屋外に整列して点呼をさせられたこと、収監者の一部が護衛兵によって

ひどく殴られていたことなどが書かれている。キャンプ全体はWRAの管理下にあるが、監房は軍の管理下にあったのだ。炊事は当番制であったが、配給される食糧の質と量がどんどんと下がっていった様子も、読んでいくとよくわかる。また、井上がいた頃は200名余の収監者がいたにも関わらず、トイレは8つしかなく、食べ物が足りないために皆が便秘していて、長蛇の列ができていたといった記述もある。その他、病人が出たのに病院に移してもらえず、ドクターが来るのも極めて遅かったこと、ストーブがなかなかつかなかったこと、狭い部屋にたくさんの人が収容されているなか風邪が流行ったこと、若者たちが下世話な話や賭博などをして時間を過ごしていたことなども、日記には記録されている。これまで、監房の内部の写真は何枚もあり、収監者の証言もわずかにはあったが、ここまで詳細に内部の様子が記述された資料は初めてであると思われる(図6、図7)。



(図6) 監房の中の部屋
(Second Kinenhi より)



(図7) 抵抗する監房収監者を強制的に動かす警備隊員
(Second Kinenhi より)

4. ツールレイク隔離収容所での食と支配

では、井上龍生監房日記のなかで、食についてはどのように書かれているだろうか。この日記の一つの特徴は、井上が毎日日記をつけており、その記述に、その日に食べた食事がすべて書かれていることである(図8)。

11月14日

朝 卵三個、コーヒー、パン、コーンフレーク

昼 レタス、レーズン、コーヒー、ケーキ、スペアリブ、ビスケット、パン

夜 マカロニ、トマトソース、マッシュポテト、コーヒー、パン、桃

これは、監房に入った当初の記述である。家を追われて以来最も豪華な食事であり、「子どもに食べさせてやりたいと思うと涙が出た」というような反応をしている。また、「新鮮な野菜はいつから食べていないか」といった記述もあり、キャンプの食事が極めて貧弱であったことを



(図8) 1943年12月18日の井上龍生ツールレイク監房日記のページ

思わせる。

ところが、監房に毎日次々と人が運ばれてくることにより、状況は急速に悪くなった。11月19日にはすでに食糧が足りず、鍋釜もないので、自炊するよう命令されたが食糧を全員分十分に用意することができない旨が書かれている。11月19日には新しい入所者にキャンプの様子を聞いたところ、キャンプの食糧も悪化していることを知る。それでも、11月23日には、たばこ、菓子、おはぎ、柿、ぶどうが、キャンプからの差し入れとして届けられた。キャンプの食べ物は「メス・ホール」で被収容者全員に決まった時間に供給されていたが、この時点で、多くの被収容者たちが売店から食糧を買っていたことがわかる。

11月27日の日記には、キャンプのバラックを兵士たちが家宅搜索し、各家庭が売店で購入したり、通信販売で買って備蓄しておいた食糧を大量に没収した、とある。そして、29日には一度に81人が搬送されてきた。収監者は200名を超え、食糧供給は危機的状況を迎える。醤油、塩、米がないという苦情を当局に訴えるも、却下。収監者の不満は溜まっていく一方であった。

12月2日 朝 パンケーキ、コーヒー
 昼 米、スクランブル・エッグ（大さじ1）、茶
 夕 米、マカロニ（人参入り）、ビーツ（酢なし）、茶

12月に入り、スクランブル・エッグは大さじ1杯のみ、マカロニには人参しか入っておらず、ビーツは酢漬けでないなど、井上の記述は食に関して、ますます詳細になっていく。

12月15日(水)朝 トースト, コーヒ,
昼 御飯, 鯛, キャベツ, 酸物
夕 御飯 煮物(キャベツ, キャロット, 牛肉), 茶

このような毎日の三食の献立に加えて、井上日記には極めて詳細な食事に関する記述がある。鯛は出たものの前日からのもので食べられないとか、マカロニは塩味だけ、などといったものである。また、当局から被収容者がゴミを出すように命令を受け、それが極めて重いこと、しかし命令に従わなければ、脅しとして「食糧を減らす」という文句が使われたことなども書かれている。

以上のことから、食はツールレイクの監房に収監された人々を制御し、支配する道具であったことを見るができる。監房だけでなくキャンプの方でも、「暴動」への対応として軍隊が収容所内部に踏み込む形で管理の強権性をエスカレートさせた後、軍が全てのバラックを捜索して、食糧を没収したということは、食が収容所という閉鎖空間において支配の道具として使われたことを意味している。自分で買った食糧を取り上げられ、住人たちはますます軍隊、WRA当局、ひいてはアメリカ政府に対して不満を募らせた。ツールレイクの元被収容者で帰米二世のジミー・ヤマイチはインタビューのなかで、収容所の食べ物が足りなかったことで親日派の人数が急増し、その影響力が大きく増したことを語っている²³⁾。

ツールレイク以外のキャンプにおいても、食糧は当初不足していた。ヒラリバー戦時転住所の場合、オープンした当初の1942年夏から秋にかけて食糧が不足したため、ツールレイク収容所から野菜などが届けられている。逆に、ヒラリバーは夏は酷暑であるが、冬は温暖な気候のため、それを利用して、1942年冬から大量の野菜の生産に成功し、他の9ヶ所の収容所に食糧を送っているのである²⁴⁾。ヒラリバーでは収容所の管理当局は、戦争中でいろいろな制限があるなか、入所者の要望にはなるべく穏便に対応しており、その結果、入所者は農場やその他の労働にも協力的な態度を保った。ヒラリバーの食糧事情は10ヶ所の収容所のなかで最も充実したものとなり、その他の騒乱も最小限に食い止められた。これはある意味、ヒラリバーの方では「胃袋から支配する」ことにWRAが成功したのに対し、ツールレイクはWRAの管理が強権的であった上に軍隊を導入したという、最も酷い失敗例と解釈することもできる。食を通じて強権的な支配を行おうとした収容所の管理当局と、彼らが招き入れた軍隊のさらに暴力的な対応によって、ツールレイク隔離収容所のインフラと社会秩序は完全なる崩壊に向かったと言えるだろう。

5. 隔離収容所の監房における食を通じた抵抗

1943年12月、ツールレイクの監房では、入所者と軍当局との間の緊張がさらに高まっていた。井上日記によれば、食糧が少なく(「パンとシチュー3さじ」などの記述あり)体力消費を避けるため、多くの収監者は一日中寝ているようになった。

12月5日 朝 ホットケーキ二枚, コーヒー
昼 米, イカ, 茶, ビーツ
夜 米, 人参, ラード, 塩, ビーツ, 茶

食糧改善の要求に軍が応じようとしなないのに対し、井上は「監房に拘束したものの、（「暴動」を扇動した）犯人を見つけられないので、無理やり反抗するよう仕向けているのだろう〔（ ）内は筆者補足、以下同〕と推察している。監房の入所者たちは話し合い、食糧改善の要求だけでなく、収監理由の説明と収監者の即時釈放を求める交渉を行うことにした。食糧に関する噂は相変わらず続き、キャンプでは「150頭の豚が病気で死んだ（と報告された）が、FBIが掘ってみると、見つかった死体は6頭であった」といった流言飛語が飛び交った。つまり、残りの豚は兵士たちが盗んだのだろう、という憶測の噂である。風邪が流行し、身体の弱い者は病気で倒れ始めた。

クリスマスが近づくと、キャンプから驚くほど大量の食べ物が監房に届けられた。キャンプの婦人会からの差し入れであった。

12月20日

（第二区画分）

握り飯 800個
ゆで卵 300個
なっばの漬物 大箱
オレンジ 53個
塩

ツールレイク収容所は、72のブロックが大きく8つの区画（ward：1区画は9ブロックからなる）に分けられていた²⁵⁾。上の日記の記述は、第二区画の婦人会が区画内の各ブロックから寄付と人手を集めて、監房用に握り飯などの食糧を用意したことを示している。

他の区画からも、饅頭、寿司、卵巻き、おはぎ、チキン、ごぼう、柿、握り飯などの食糧が差し入れされ、監房の入所者たちはそれを全員で分け合って堪能した。ところが、12月23日に監房で入所者同士での暴力沙汰が生じ、関係者数名が逮捕される事態になった。監房内の騒動と当局への抵抗に対して、軍当局はクリスマスの日には「パンと水だけ」しか支給しなかった。

12月26日、ハワイから集団で移送されてきていた人々のうちの一人で、かねてから体調が悪かったハヤシ・タモツという25歳の青年が死亡した。ハワイから来た集団はキャンプの中に知り合いがおらず、ハヤシの友人はハヤシと一緒に監房に収監されていたため、本人も友人たちも葬儀は監房のなかで執り行うことを希望していた。しかし、軍はその要望も却下した。

12月31日の点呼の際、ついに収監者全員が外に出ることを拒否した。監房にいた200名前後のメンバーが全員一致でハンガーストライキに入ることを決めたのだ。ストライキは、6日間にわたって決行された。ハンガーストライキ中の日記の記述を見てみよう。

一月四日 曇天、絶食、粉吹雪

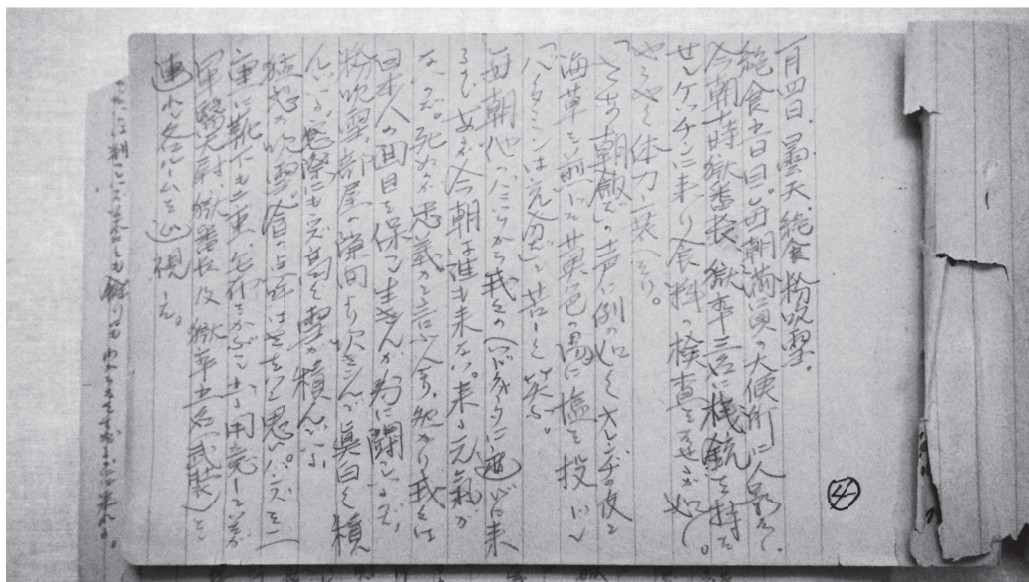
絶食五日目、毎朝満員の大便所に人影なし。今朝十時獄番長、獄卒三名に棧銃（ママ）を持たせてキッチンに來り。食料の検査をなせるが如し。やうやう体力衰へをり。

「さあ、朝飯だ」の声に例の如くオレンヂの皮と海草を煎じた黄色の湯に塩を投じて「バイタミンは充分だ」と苦々しく笑ふ。

毎朝他のバラックから我々のヘッドクォーターに遊びに來るのであるが、今朝は誰も來ない。來る元氣がないのだ。死ぬのが忠義かと言ふ人あり。然り我々は日本人の面目を保って生きがために闘っているのだ。

粉吹雪、部屋の隙間より吹き込んで、真白く積んでいる。窓際にもうず高く雪が積んでいる。

猛烈な吹雪。今日の点呼はさむいと思い、パンズを二重に靴下も二重。毛布をかぶって出る用意をしているが、軍医大尉、獄番長、及獄卒五名（武装）をつれて、各ルームを巡視した。



(図9) 1944年1月4日の井上龍生ツールレイク監房日記のページ

1月1日の日記には、極寒のなか屋外で点呼する様子などが記述されているが、4日の記述から、この日には屋外での点呼は行われなかったことがわかる。体力が限界に近づき、ハンガーストライキを諦める声も出始めるなか、井上は続行を支持した。日記にも書かれているが、ツールレイクの状況は実は日本政府も注目していた。すでに長期にわたってアメリカに住み、永住するつもりであるとはいえ、一世は法律上は日本国籍者であり、自国民に対する迫害は日本政府がアメリカ政府の非人道的政策としてプロパガンダに利用する可能性もあった。また、日本に足止めになっているアメリカ国民は一種の捕虜状態にあったわけで、日本国民をアメリカ政府

が死なせてしまった場合には、彼らに危害が及ぶことも考えられなくはなかった。このことから、井上は何度も「アメリカ政府が我々を殺すことはできないのだから、もう少し頑張れば必ず軍隊は折れて、我々の要求を入れる」旨の記述をしている。しかし、1944年1月6日、収監者全員の多数決（157対45）の結果、ハンガーストライキの中止が決定された。この日の日記には、ストライキを継続するかどうかに関する緊迫した会話が書き留められており、その詳細はSUYAMAプロジェクトの英訳で読むことができる。

食べ物が山積みになっているキッチンに駆け込んで、兵士たちがあざ笑うなか、パンにむしゃぶりつく若者たちを、井上は屈辱を噛み締めながら見つめた。もちろん、12月の日記では食糧が不足していくなか若者たちがお腹を空かせて苦しんでいることに同情的な記述をしているので、彼らへの憐憫の情はあったのだろう。しかし、一度決意を固めてストライキに入った以上、軍に屈服して食べ物を食べてしまうことで、今後一切の交渉の道は失われるだろうと彼は嘆いた。この後、日記はどちらかというとい省的な傾向を帯び始める。『菜根譚』を読み、家族に思いを馳せ、心の平穏を保とうとする日々が1ヶ月半近く続いたのち、彼は突如釈放され、家族の住むキャンプのバラックに戻ったのだ。SUYAMAプロジェクトの翻訳された日記はここで終わっている。原文の日記はこの後も続くのだが、その分析は別稿に譲ることとする。

6. おわりに

ハンガーストライキは、圧倒的に不均衡な権力関係のなかでサバルタン（弱者）が取りうる究極的かつ絶望的な抵抗手段である。ハンガーストライキが成功し、サバルタン側が要求を通すことができたという例は歴史上極めて少ないと思われる。しかし、敵国日本との繋がりのみを理由として、何の法も犯していない日系人たちを家から追放し、収容所に閉じ込め、さらに何の嫌疑の説明もなく「監獄の中の監獄」ともいえる監房に家族から引き離して収監したアメリカ政府に対し、「トラブルメーカー」のレッテルを貼られた被収監者たちが、自分たちへの支配と抑圧の手段とされた食を断つことで、その支配を拒否する姿勢を見せたという点は考察に値するだろう。支配に屈しない姿勢を、井上は日記のなかで「武士は食わねど高楊枝」という日本の諺で表現している。ハンガーストライキが挫折した後、彼が内省的になりつつも状況を冷静に分析し、平常心を保とうとしたことも、軍やWRA当局からの支配を拒否する、一つの抵抗であったと考えることもできるかもしれない。井上のアイデンティティにおける、祖先の国であり育った国でもある日本の位置付けについては、より深い考察が必要であり、今後の研究課題とせざるを得ない。しかし、連続講座のテーマである「食と支配・抵抗」という観点から日系アメリカ人の強制収容を考えるという目的が、新たに発見された資料紹介を通じて少しでも果たされたとしたら、筆者としては幸いに思う。

注

- 1) たとえば、日系アメリカ人を中心として立ち上げられた Tsuru for Solidary という NPO は、トランプ政権の非正規移民や亡命希望者の収監、特に親子を別々に収監する政策を「人種主義に基づいた非人道的な移民政策」と位置付け、収監施設の前での抗議活動や、さまざまな場所での教育活動を展開してい

る。この団体の「Never Again is Now (二度と過ちを繰り返さないという声を今)」というスローガンは、第二次世界大戦時に「我々日系アメリカ人のために抗議の声を上げた人はいなかった」ことから、「今日我々が立ち上がる」必要性について訴えるという意味が込められている。

<<https://tsuruforsolidarity.org>> アクセス日：2020年1月24日。

- 2) 日系人の世代別呼称として一般的に使われている「一世」は日本からアメリカへと移住した人々をさす。「二世」は、彼らのアメリカ生まれの子どもの世代をさす。1952年までアメリカ合衆国は日本国籍者がアメリカに帰化することを認めていなかったため、「一世」はアメリカに長期滞在していたとしても日本国籍を保有したままであった。ちなみに、合衆国は1943年まで中国人の帰化権を認めておらず、その他のアジア諸国からの移民も第二次世界大戦終了後まで「帰化不能外国人」としていた。
- 3) 和泉真澄「ヒラリバー強制収容所の農業活動に見る日系アメリカ人の生存戦略—戦時中の一世代の活動再考に向けて」『移民研究年報』22号(2016年), 3-21頁。Masumi Izumi, "Gila River Concentration Camp and the Historical Memory of Japanese American Concentration Camp," *Japanese Journal of American Studies* 29 (2018): 67-87.
- 4) Peter Irons, *Justice at War: The Story of the Japanese American Internment Cases* (Berkeley: University of California Press, 1983). 山倉明宏『市民的自由—アメリカ日系人戦時強制収容のリーガルヒストリー』(彩流社, 2011年)。
- 5) ミネ・オークボ画・著『市民13660号—日系女性画家による戦時強制収容所の記録』(御茶の水書房, 1984年)。
- 6) 日系人強制収容が、戦後のアメリカの市民的自由と人種概念、軍と国家の非常事態に関わる法制度にどのような影響を与えたかについては、拙著を参照されたい。和泉真澄『日系アメリカ人強制収容と緊急拘禁法—人種・治安・自由をめぐる記憶と葛藤』(明石書店, 2009年)。Masumi Izumi, *The Rise and Fall of America's Concentration Camp Law: Civil Liberties Debates from the Internment to McCarthyism and the Radical 1960s* (Temple University Press, 2019).
- 7) 柳田由紀子『二世兵士 激戦の記録—日系アメリカ人の第二次大戦』(新潮新書, 2012年)。E・L・ミューラー著、飯野正子監訳『祖国のために死ぬ自由—徴兵拒否の日系アメリカ人たち』(刀水書房, 2004年)。
- 8) ツールレイクに関する研究は、1990年代頃より日本人の移民研究者が何人か行っている他、アメリカではツールレイクの元被収容者が手記などを刊行している。篠田左多江「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動②トゥールレイク収容所」『東京家政大学研究紀要』29号(1989), 11-21頁。Hiroshi Kashiwagi, *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings* (San Mateo: Asian American Curriculum Project, 2005). Tule Lake Committee, *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake* (Tule Lake Committee, 1997). 村川庸子『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人』(御茶の水書房, 2007年)。本多善「日系マイノリティの歴史から見るアメリカ多文化主義批判—ツールレイク強制収容所のサバルタン史から」(博士論文, 龍谷大学, 2017年)。
- 9) 監房の建物のうち現在でも見ることができる Jail と呼ばれた建物を建てたのは、ツールレイクの被収容者で帰米二世のジミー・ヤマイチである。Martha Nakagawa, "Obituary: Jimi Yamaichi, WWII Resister and 'Soul and Conscience' of Tule Lake Pilgrimage." *Rafu Shimpo*, May 18, 2018.
- 10) Duncan Ryuken Williams, *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War* (Harvard University Press, 2019), 194.
- 11) 2つの祖国のなかでの二者択一がいかに日系人にとって不可能な選択であったかは、ジョン・オカダの小説に鋭く描かれている。ジョン・オカダ著、川井龍介訳『ノー・ノー・ボーイ』(旬報社, 2016年)。
- 12) 村川, 前掲書。Barbara Takei, "Legalizing Detention: Segregated Japanese Americans and the Justice Department's Renunciation Program," *Journal of the Shaw Historical Library* 19 (2005): 75-105.
- 13) Japanese American National Museum, "4th National Conference in Seattle to Commemorate the 25th Anniversary of the Signing of the Civil Liberties Act of 1988," July 4-7, 2013.

- 14) Tatsuo Ryusei Inouye, *Tule Lake Stockade Diary*, November 13, 1943 – February 14, 1944 (UCLA Asian American Studies Center, 2018).
<<http://www.suyamaproject.org/?p=721>> アクセス日：2020年1月23日。
- 15) 井上家に関する情報は、彼の FBI ファイル、SUYAMA プロジェクトのウェブサイト、日記の記述のほか、主にナンシー・キョウコ・オダとのフォーマルおよびインフォーマルな会話のなかから得られたものである。
- 16) 筆者が参加した2018年のツールレイク巡礼 (Tule Lake Pilgrimage) においても、元被収容者の参加者の複数が親日派からの圧力に言及していた。一方、Konrad Aderer, *Resistance at Tule Lake* (DVD, Labheart Media and Life of Liberty, 2018) に含まれる弁護士ウェイン・コリンズらのインタビューでは、戦争中にアメリカ国籍を放棄した人々の国籍を戦後に回復するために、戦中の国籍放棄は親日派から圧力を受けた結果しかたなく行ったということにした、と証言されている。Hiroshi Kashiwagi, “Wayne M. Collins,” in *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings* (San Mateo, Calif.: Asian American Curriculum Project, 2005), 176–84.
- 17) 本多, 第4章から第7章。
- 18) Roger Daniels, *Asian America: Chinese and Japanese in the United States Since 1850* (University of Washington Press, 1989). Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (Oxford University Press, 2005).
- 19) アメリカの戦争努力への貢献としての労働と、不自由なキャンプ暮らしに苦しむ同胞のための労働との区別という点については、他のキャンプでも議論されていた。たとえば、筆者の調査したアリゾナ州のヒラリバー戦時転住所では、戦争で労働者が不足していた綿花栽培に日系人を低賃金で動員しようというアリゾナ州綿花生産組合の要望が WRA に提出されたとき、WRA は労働者が集まらないことを理由に、生産組合と交渉して賃金を上げさせている。それでもキャンプ住人は同胞の食糧を育成する農場の労働を優先し、キャンプ外の綿花農場への労働者募集にほとんど応じなかった。和泉「ヒラリバー強制収容所の農業活動」, 13-14 頁。
- 20) 同上, 6 頁。
- 21) ダンカン・ウィリアムズによると、農場トラックの死亡事故のあと、当局に抗議した集会のリーダーの一人は、アーカンソー州ジェローム収容所から移送されてきた甲斐シズオという僧侶であった。「暴動」の結果、軍隊が介入すると、甲斐らは兵士に激しい暴行を受けた末、監房に収監された。Williams, 196.
- 22) Densho Encyclopedia の Tule Lake の解説ページより。Densho Encyclopedia は、シアトルを本拠とする Densho という日系アメリカ人に関わる歴史記述、インタビュー、デジタル化したコミュニティ新聞などを収録してあるウェブサイトに付随する、日系アメリカ人史に関するキーワードを説明したものである。Encyclopedia に掲載される情報の全体を統括しているのは日系アメリカ人史を専門とするブライアン・ニイヤであり、それぞれの項目を執筆しているのは、そのトピックを専門としている研究者なので、記述内容は信頼に足るものである。
<<https://encyclopedia.densho.org/Tule%20Lake/>> アクセス日：2020年1月24日。
- 23) 本多, 102-103 頁。ジミー・ヤマイチは、戦後にコミュニティから沈黙を強いられていたツールレイクの歴史を残すために大きな役割を果たした。Nakagawa, “Obituary: Jimi Yamaichi,” *Rafu Shimpo*, May 18, 2018. ヤマイチのインタビューは Densho や 全米日系人博物館, Tule Lake Committee などのウェブサイトから視聴することができる。
- 24) 和泉「ヒラリバー強制収容所の農業活動」, 5-9 頁。
- 25) National Park Service, “WWII Valor in the Pacific National Monument, Tule Lake Unit, Camp Layout.”
<https://www.nps.gov/tule/planyourvisit/upload/Camp_Layout.pdf>
アクセス日：2020年1月24日。

